

「小中高の接続を意識した外国語による言語活動の工夫」

研修・支援部 研究主事兼指導主事 大 槻 裕 代
研究主事兼指導主事 長 島 正 博
研究員 竹 本 恵

要約

新学習指導要領全面実施に向けて、全国的に小学校、中学校、高等学校すべての校種において外国語教育の質的改善が図られている。

その特徴的なこととして、4技能5領域において小中高で一貫した指標形式の目標が設定されているということが挙げられる(表1参照)。つまり、それぞれの校種で意識しなければならないことは、外国語活動や外国語科の授業において、言語活動を通して学んだことで何ができるようになるかを段階的に捉え、その接続をしっかりとしていくことが必須であるということである。そして、詳しくは後述する言語活動における問題意識とその背景で述べているが、新学習指導要領では、外国語教育の授業の在り方について様々な課題が指摘されている。その1つに、「学校種間の接続が十分とは言えず、進級や進学をした後に、それまでの学習内容や指導方法等を発展的に生かすことができないといった状況も見られている」といったものがある。こういった課題改善のために、このように一貫した指標に基づいて目標が設定されたことは大きな意義があることから、「小中高の接続を意識した外国語による言語活動の工夫」について研究し、それを研修講座や出前講座で取り扱い、普及・推進を必要を強く感じている。

表1 指標形式での領域目標(話すこと)の例

小学校(中学年)	小学校(高学年)	中学校	高等学校
(例) ・自分や身の回りのごく限られたことについて、自分の気持ちなどを伝えようとするようにする。	(例) ・身近で簡単なテーマについて、初歩的な英語で簡単なスピーチをすることができるようにする。	(例) ・身近な事柄や出来事について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする。	(例) ・身近な話題や知識のある話題について、簡単な外国語を用いて情報や意見を交換し合うことができるようにする。

キーワード：新学習指導要領，指標形式の目標，言語活動，課題改善，小中高の接続

1 問題意識とその背景

平成20年(高等学校は平成21年)改訂の学習指導要領は、小・中・高等学校で一貫した外国語教育を実施することにより、外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度や、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする力を身に付けさせることを目標として掲げ、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」などを総合的に育成することをねらいとして改訂され、様々な取組を通して指導の充実が図られてきた。

その一方で、外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ（平成 28 年）によると、以下のような課題が指摘されている。

- ① 児童生徒の学習意欲に関する課題と小・中・高等学校間の接続の課題
- ② コミュニケーション能力の育成を意識した取組の課題

具体的に、①は小・中・高等学校と学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲に課題が生じるといった状況や、学校種間の接続が十分とは言えず、進級や進学をした後にそれまでの学習内容や指導方法等を発展的に生かすことができない状況が見られること、②は、特に中・高等学校の授業では、依然として文法・語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点が置かれ、外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に「話すこと」及び「書くこと」などの言語活動が適切に行われていないことや「やり取り」や「即興性」を意識した言語活動が十分でないこと、読んだことについて意見を述べ合うなど、複数の領域を統合した言語活動が適切に行われていないといったことが挙げられる。また、習得した知識や経験を生かし、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて適切に表現することなどに課題があるとも指摘されている。

こうした成果と課題を踏まえ、今回改訂された学習指導要領では小学校中学年に新たに外国語活動を導入し、三つの資質・能力の下、「聞くこと」「話すこと」の音声面を中心とした外国語を用いたコミュニケーションを図る素地を育成した上で、高学年において「読むこと」、「書くこと」を加えた教科として外国語を導入し、五つの領域の言語活動を通してコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することとしている。中・高等学校ではこうした小学校での学びを踏まえ、五つの領域の言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力を育成することとしている（表 2 参照）。

表 2 目標の柱書

小学校第 3 学年及び第 4 学年外国語活動	小学校第 5 学年及び第 6 学年外国語	中学校 外国語	高等学校 外国語
外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

2 言語活動について

従来、中・高等学校で行われていた言語活動は、「言語材料についての知識や理解を深める活動から、考えや気持ちなどを伝え合う言語活動まで…」と幅広く指していたが、今回の改訂を受けて言語活動の捉え方が見直された。言語活動は「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う活動」を意味する（小学校外国語活動・外国語科研修ガイドブック[平成29年]）。つまり、言語材料について理解したり文の一部を言い換えたりするパターン化されたドリルのような活動とは区別されており、その指導については、「単に繰り返し活動を行うのではなく、児童生徒が言語活動の目的や言語の使用場面を意識して行うことができるよう、具体的な課題等を設定し、その目的を達成するために、必要な言語材料を取捨選択して活用できるようにすることが必要である。」と学習指導要領の外国語活動や外国語科においても示されている。

3 研究の目的と方法

「言語活動」を中心に捉えた授業構成についての研究を深めるために、各種研修会へ積極的に参加をし、実践事例を収集することとした。収集する事例の具体としては、①思考を伴い、児童生徒が外国語を通して考えや気持ちを伝え合う「言語活動」について、②言語運用能力向上を図った授業における「言語活動」の効果的な指導法について、③外国語による見方・考え方を働かせた指導についての3点とすることとした。

4 結果

(1) 「ICEモデル」の考えを取り入れた授業実践

「ICEモデル」とは、カナダで開発・実践された学習・評価モデルのことであり、Iは「Ideas（基礎知識）」、Cは「Connection（つながり）」、Eは「Expansion（応用）」の頭文字で、学びの各フェーズを表している。基礎的知識（Ideas）の間のつながり（Connection）を適切な質問と指導を通じて理解させ、さらに自らの体験に結びつけた知の応用（Expansion）へ発展させることを意図した指導方法である。このICEモデルは、それぞれの指導内容において取り入れることができるので、学習者の段階に応じて工夫がしやすい。

例えば、文法事項のうち「一般動詞」についてであれば、Iフェーズでは「今までに学習した動詞を20個以上あげる」、Cフェーズでは「それらの動詞の派生語や意味を調べて、最も有用性が高いと考えるものから順番に10個選ぶ」、Eフェーズでは「その10個の動詞を使って、自分の1日についてできるだけ詳しく伝える」というものである。

あるいは、「教科書の内容」について、Iフェーズでは「教科書の本文に書いてあることへの理解」、Cレベルでは「自分との関係性や経験について考える」、Eフェーズでは「自分の立場や意見について考える」とすることで、学習者を段階的に思考させることができる。

一例として、単元の中で職場体験プログラムにおいて、高齢者福祉施設にある介護用ロボットのことについて扱っている中学校の教科書（NEW CROWN 2 Lesson2 My Dream part2 [三省堂]）の本文をもとに、それぞれのフェーズでの発問を示す。

教科書本文の指導場面：ケン（Ken）が職場体験プログラムでロボットについて学んで来たことについて発表している。

- ・ Iフェーズ＝“What kind of robot did Ken see?”
- ・ Cフェーズ＝“Do you know this robot?”
- ・ Eフェーズ＝“What kind of robot do you want?”

主語が“Ken”である I フェーズの質問では教材の内容理解を図っている。そして、主語が“you”である C フェーズの質問では自分との関わりの中で考えさせ、主体性を持たせることにつなげ、同じく主語が“you”である E フェーズの質問で、自分の意見や考えを表出させることへと広げていくことを意図している。このように、C フェーズと E フェーズにおいて主体性を持たせることで、教科書の内容理解に留めず、教科書を活用し、思考を伴った言語活動へとつなげることができる。

(2) Motivating & Realistic を重視した指導法

学習者を「Motivating (やる気のある)」にさせる工夫や「Realistic (現実の)」な課題設定をすることで、学習効果を高められるという考え方である。そのためには、例えば言語活動をする際に、興味・関心・経験の違いや、相手が知らない情報を伝え合うといったことを意図した課題の設定をしたり、コミュニケーションを行う目的や場面、状況を明確に設定するなどの工夫が必要である。以下に改善が必要な例を示す。

例 1 : 「Conversation as simple grammar pattern practice」 (単純なパターンプラクティスのような会話)

T : How is the weather today?
S : It is sunny.
T : What is the day today?
S : It is Monday.
T : What is the date today?
S : It is November 5 th .

これらのやりとりについては答えが決まっていることであり、なおかつそこに“Information Gap”が存在しないので、「聞きたい」「伝えたい」という意欲を育てるものではない。

例 2 : 「Unnatural models of conversation [ex : parroting)」 (不自然な会話モデル [例 : オウム返し])

T : What did you do on the weekend?
S : I went shopping.
T : Oh, you went shopping.

「parroting」とは、「to repeat exactly what someone else says, without understanding it or thinking about its meaning (誰かが言うことを、その意味について理解したり考えたりすることなく繰り返すこと)」という解釈である。つまり、言語活動において相手の話したことを繰り返すことは、相手の意見を「聞いている」ということを伝えることにおいては有用であるが、思考しなくてもできるということである。parroting そのものを否定的に捉えるのではなく、重要なのは、まず parroting する必要がある場面であるか、そして、相手の話を聞いたうえで自分の意見を述べたり、質問したりするといった思考を伴った会話の継続が図れているかどうかということである。安易に何でもかんでも parroting をするということは不自然な会話のモデルを示してしまうことにもつながりかねないので、指導者は、特に学習者とのやりとりに対して、その話題に応じた切り返しを意図していくことが重要である。

例3 : 「No feedback, or purely non-linguistic feedback」

(活動に対するフィードバックがなかったり、まったく言語に関していないフィードバック)

言語活動の後

T : Well done everybody. Nice smile. Big voice. Great!!

意欲をもって言語活動に取り組んだことに対して肯定的な評価をすることは大切なことであるが、それだけでは「言語に関する」という点において不十分である。また、学習者全体の言語活動について把握することはできないので、いくつかのペアやグループに絞って具体的事例を把握し、全体に返しながらもう一度相手を変えてチャレンジさせるといった、「言語に関する」視点での改善と向上を図ることが重要である。

例4 : 「Too much support, not enough support」

(十分すぎる支援、足りない支援)

- Scripts to memorize
- Written skits

学習者に自分の力で取り組ませることで言語運用能力の向上を図るのであれば、例えば「覚えるための原稿(Scripts to memorize)」や「台本通りのスキット(Written skits)」のように支援をしすぎることで、学習者はその場面ではなく原稿に書かれた英文を表出するという活動となってしまう、実際の場面でどのように対応すればよいか学習者が思考をする機会を奪ってしまう。これらのすべてが否定されるものではないが、ゴールとするのではなく、練習段階と位置付けて、即興的に対応できるようなタスクを設定することが必要である。また、以下のような例も挙げておく。

言語活動の指示として

T : OK, let's Talk about your favorite place in Japan. Go!

即興性だけを求めて、何の脈絡もなく言語活動を提示するだけでは、「誰に対して」「どの場面で」「なぜこの話題で」といった、目的・場面・状況の設定ができていないので、現実のものとして考えず、学習者は機械的なやりとりを行うだけになってしまう。

例5 : 「Demotivating, or unrealistic topics」

(やる気をなくさせたり、非現実的な話題)

- Do you like studying English?
- How hard did you study last night?
- How can we make World Peace?

言語活動では、学習者にお互いの考えを「言いたい」「聞きたい」「伝え合いたい」といった気持ちにさせることが重要であるが、これらの話題ではそういう気持ちにならなったり、あまりに非現実的な話題であれば、答えに詰まってしまう。答えに詰まってしまうことにおいて大切なのは、「言いたいけれどどのように言えばよいかわからない」のか、「特に言いたいことがない、思いつかない、何を言えばよいかわからない、自分の意見を明確にもっていない」のかでは、その質が異なる。

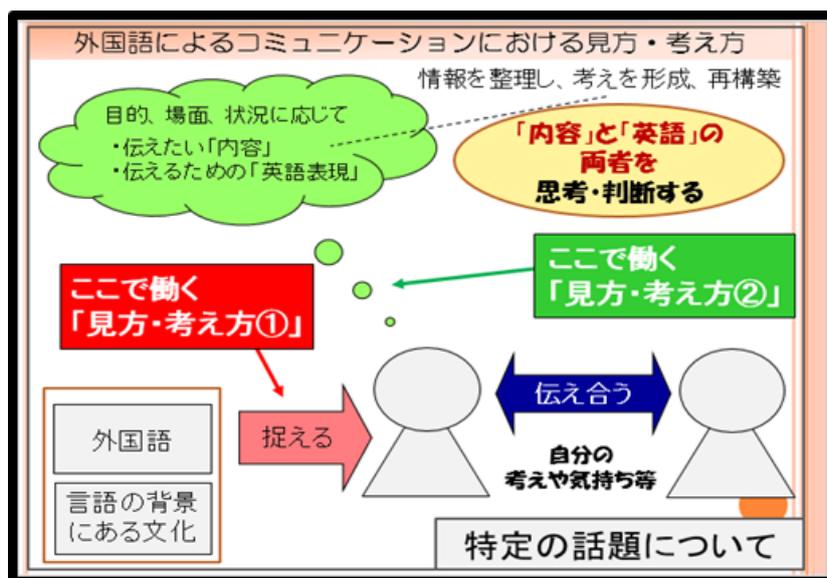
る。前者であればその疑問を学習者全体に返して、学習者の力で表現を学び合わせることが可能であるが、後者であれば意欲的な学びにつなげられないと思われる。

上述のことから、学習者を **motivating** にさせるには様々な工夫が必要であるが、その中でも **Information Gap** があること、活動を行う目的・場面・状況の設定が適切であること、そして現実的な話題を扱うことで、学習者が意欲的に言語活動に取り組み、思考を伴いながら自分の考え、意見、気持ちなどを表出させることができる。また、学習者に気付かせたり新しい視点を生み出させたりといったことを意図したフィードバックを繰り返していくことで、言語活動の内容がより充実したものになっていくと考える。

(3) 「外国語による見方・考え方を働かせた指導」

パターン・プラクティスなどの「言語練習」からの脱却を図ることが大切である。そのためには、図1のように外国語におけるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせることが必要である。以下に **Small Talk** と **Small Debate** を一例として示す。

図1：外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方
(文部科学省山田調査官作成資料より抜粋)



例えば“Do you have a pen?”という問いに対して、“Yes, I do.”と答えることは文法的にも正しいが、「どんな場面で」「なぜこの質問をされているのか」という視点が抜けている。

見方・考え方を働かせていない単なる Q&A の活動例

S1 : Do you have a pen?
S2 : Yes, I do.

図1の『ここで働く「見方・考え方①」』のように、この質問はどのような場面でされるものなのか、相手がなぜその質問をしてきているのかといった見方・考え方を働かせ、さらに、『ここで働く「見方・考え方②」』のように、どのように応答することが適切かという視点でやりとりをすることで、言語活動の内容が変わってくる。

小学校での例：Small Talk 「質問に適切に応じる」

S1 : Do you have a pen?

S2 : Yes. Here you are.

S1 : Thank you!

S2 : You're welcome.

中学校での例：Small Talk 「質問に適切に応じる」

S1 : Do you have a pen?

S2 : Yes. Why?

S1 : I want to take a note, but I don't have one now.

S2 : I see. OK, use this.

S1 : Thank you so much!!

S2 : No, not at all.

高等学校ではこういった小学校や中学校での Small Talk のような対話活動の継続によって身に付けたコミュニケーション能力をもとに、Small Debate へと発展させる。

高等学校での例：Small Debate 「Which is better, hand writing or type writing?」

S1 : I think hand writing is better than type writing. Because its shape is characteristic and looks hearty. What do you think?

S2 : It's a good point of view. But in my opinion, type writing is better. Because it's easier and faster to write. Now people are really busy, so we need to make time.

S1 : That's true. But we can save the documents to computers.

S2 : Exactly. But we also use a scanner to do so.

S1 :

S2 :

(1) (2) (3)の事例から、小中高での接続を意識した言語活動の在り方については、まさにICEモデルのように、小学校段階では簡単な表現に出会い、外国語に慣れ親しんだり、身に付けさせる。中学校段階では新しい語彙や文法事項を学び、より具体的で幅広い表現ができるようにつなげていく。そして高等学校では、小学校・中学校で身に付けた表現力を元に、論理的な表現力が求められる課題を設定し、より表現力を広げていくといった視点で行われるべきであると考えられる。

5 考察

単に情報の理解をしたり、知識の習得をねらいとするだけの活動やパターンプラクティスからの脱却、つまり、「活動あって学びあり」という視点での言語活動を小中高で一貫して行うためには、教員間での共通理解が必須である。また、いかに学習者を **motivating** な状況に導き、思考を伴った言語活動に取り組みせられるか、そしてそれを単発ではなく継続的に行えるかについては、指導者の指導観や学習課題の設定の仕方などの意図によるものが大きい。このような視点からも、外国語教育の在り方が大きく見直され、外国語科の教員にはこれまでの指導の在り方を振り返り、ブラッシュアップすることが求められていることがわかる。ただ、これまでの指導が全て否定されるものではなく、語

彙や文法事項などの知識の習得は必要であるが、その学びの先につなげられておらず、「何ができるようになったか」や「既習事項を駆使して自分の力で表現する」ということが不十分であったということが課題であるので、学習者の言語習得レベルや使用状況に配慮して、小中高それぞれの段階において言語活動が適切に位置付けられるように推進していく必要がある。

そのためには、研修講座や出前講座において、これらの視点で言語活動について取り扱い、教員間で共通理解の下で、実践力向上を図らなければならない。あれもこれもと求めることはできないので、いくつか絞ることとすると、まず、これまで言語活動とみなされていた「言語材料の知識や理解を深める言語活動」と「実際に英語を使用して互いの気持ちや考えを伝え合う言語活動」を区別して捉えること、次に、既習表現を用いて学習者に自分の力で英語を表出させ、それを繰り返すこと、そして、小中校一貫した接続のためにも、それぞれの校種での具体的な言語活動の在り方について、明確なイメージをもつことを重視した内容の講座構成をすることが必要である。

引用文献

- ・ 高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編（文部科学省 [平成 30 年 7 月]）
- ・ 小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編（文部科学省 [平成 29 年 7 月]）
- ・ 中学校学習指導要領解説 外国語編（文部科学省 [平成 29 年 7 月]）
- ・ 小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック（文部科学省 [平成 29 年 6 月]）
- ・ 外国語ワーキンググループによる審議の取りまとめ（文部科学省 [平成 28 年 8 月]）

参考文献

- ・ NEW CROWN 2 ENGLISH SERIES New Edition（三省堂 [平成 28 年 2 月]）
- ・ 「主体的学び」につなげる評価と学習方法 - カナダで実践される I C E モデル -
（Sue Fostaty Young 原著、Robert J. Wilson 著、東信堂 [平成 25 年 5 月]）

平成 30 年度参加研修会・研究会

- ・ 平成 30 年度小学校における外国語教育指導者養成研修
[平成 31 年 2 月 27 日（水）～3 月 1 日（金）]
於 福井県勝山市立成器西小学校（初日の授業参観及び研究協議）、福井県教育総合研究所教職研修センター（全日程）
- ・ 英語教育推進リーダー中央研修フォローアップ研修 [平成 31 年 2 月 16 日（土）]
於 TKP ガーデンシティ大阪梅田
- ・ 第 15 回全国小学校英語教育実践研究大会三重大会 [平成 31 年 2 月 1 日（金）・2 日（土）]
於 三重県四日市市立常盤小学校（初日）、三重県四日市市文化会館（2 日目）
- ・ 小学校英語教育学会 第 7 回近畿ブロックセミナー **Let's Try! We Can!**
－小学校英語教育の早期化・教科化への完全実施に備えよう－ [平成 31 年 1 月 6 日（日）]
於 神戸市外国語大学
- ・ **British Council** 教育委員会対象 英語教育ワークショップ [平成 30 年 11 月 29 日（木）]
於 オフィスパーク名駅プレミアムホール&会議室
- ・ 第 68 回全国英語教育研究大会 [平成 30 年 11 月 16 日（金）・17 日（土）]
於 びわ湖ホール（初日）、ピアザ淡海、コラボしが 21（2 日目）
- ・ オックスフォード デイ 2018 [平成 30 年 10 月 21 日（日）]
於 慶應義塾大学 三田キャンパス